

芥川龍之介における西洋古典の受容－「神神の微笑」と「文芸的な、余りに文芸的な」を中心に

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D145255

氏名：Damaso Ferreira Posse (ダマソ、フェレイロ・ポッセ)

本論では様々な作品に触れるのだが、何よりも主な研究対象として芥川龍之介の「神神の微笑」と「文芸的な、余りに文芸的な」の二作を取り上げる。その理由は、両作では西洋古典のモチーフが積極的に用いられており、さらに作品の中で重要な機能を果たしているためである。また「文芸的な、余りに文芸的な」の「三十一 西洋の呼び声」というヨーロッパを強く意識させる文章によって締めくくられることも見逃すことはできない。両作品の分析とともに、作品のコンテクストを探る試みとして明治・大正の日本社会における西洋古典の浸透度や、十八・十九世紀のヨーロッパ文学における西洋古典の役割にも注目する。本研究では主にこの両作を西洋古典をキーワードに分析するが、作品のジャンルごとに分析方法が異なることに留意しておかねばならない。

西洋古典というモチーフは非常に意味の広い概念である。そのため「神神の微笑」では、ハイネの小説『流刑の神々』と比較し、古代ギリシャの神々の扱われ方、古代ギリシャと神道の神々との関係性に限定する。また「文芸的な」の場合では、「三十 野性の呼び声」と「三十一 西洋の呼び声」に絞り、芥川の芸術論に見られる新プラトン主義の影響や、晩年の芥川思想におけるニーチェの「アポロ・ディオニュソス論」の受容、身体美の理想像としてのミロのヴィーナスの存在の三つの課題を中心に論述する。

研究目的と研究意義

本研究の目的は、芥川の諸作品の精読を通して、芥川文学における西洋古典が果たしている役割、西洋古典のモチーフとしての扱い方、その扱い方から透けて見える芥川の西洋古典の知識の深さの三点を解明することである。さらに、以上のことを分析するとともに、先行研究が少ない芥川とハイネおよび芥川とニーチェの関係性にも焦点を当て、その受容のあり方を提示する。

本研究によって、三つの視点から芥川文学における西洋古典の要素の扱われ方を明らかにすることは、以下の三つの点で意義深い。第一に、芥川文学の新しい理解である。西洋人が日本人の、現代人が昔人の間の思考やメンタリティーを理解することは可能であろうか—これに関して、芥川の考え方は明瞭である。日本人は西洋の古典文学を、西洋人は日本の古典文学を未だに理解し合っていないが、彼は相互理解が実現する日を待望している。「文芸的な、余りに文芸的な」では、芥川は「僕はこの不可思議なギリシアこそ最も西洋的な文芸上の作品を僕等の日本語に翻訳することを遮っているのではないかと思っている。或は僕等日本人の正確に理解することさえ（語学上の障害は暫らく問わず）遮っているのではないかと思っている。（中略）この問題を逆にすれば、紅毛人の漢詩を理解しないのも当然であると言わなければならぬ。僕は英大博物館に一人の東洋学者のいることを聞き囁っている。しかし彼の漢詩の英訳は少くとも僕等日本人には原作の醍醐味を伝えていない。」（「文芸的な、余りに文芸的な」 「三十一 西洋の呼び声」）と述べている。つまり芥川の言葉を借りれば、西洋の古典と漢字文化の古典は未だに「握手」していないといえる。晩年に書かれた「文芸的な」だけでなく、それ以前の作品である「神神

の微笑」においても同様の記述が見られる。芥川は一貫して西洋・東洋の相互理解を進歩させようと試みた。異なるものを理解し合うことが芥川にとってそれほどまでに重要な課題だったのである。それにもかかわらず、芥川文学の研究では取り組まれたことのない課題であった。

第二に、西洋古典への深い理解である。芥川文学に絶えず登場する西洋古典の要素がこれまで研究されたことがなかったように、近代日本における西洋古典の文学的受容、またはその変容が、西洋古典の視点からほとんど注目されていないという課題である。西洋もしくはヨーロッパ文学の本質を追求するエドワード・サイードや、エーリヒ・アウエルバッハ、近年のサルバトーレ・セッティスなど、多数の著名な研究者の仕事には、西洋古典そのものの概観を把握するために西洋世界の境界線を超え、広い視野から、西洋、またその根本をなす古典古代をアプローチする必要性が説かれている。換言すれば、多文化の中で行われる西洋古典の吸収・受容過程を知ることによって、西洋古典の実体もなおいつそう明らかになっていくということである。

第三に、比較文学への貢献が挙げられる。日本文学と西洋の古典文学を比較する論文は散見されるが、それを主題とした研究書は2014年まで皆無であった。その年にヴィープリケ・デネケの *Classical World Literatures: Sino-Japanese and Greco-Roman comparisons* という画期的な研究が発表され、これによって比較古典文学という研究分野が誕生した。新たな研究分野ということもあり、比較古典文学には未だに未熟な点が多く、批判の声を上げる者も少なからずいる。

しかし、デネケのような「西洋の古代文学に対する東洋の古代文学」の研究だけでなく、例えば本研究で行なわれている「日本の近代文学における西洋の古典文学の受容」、もしくは「西洋の現代文学における日本の古典文学の受容」を比較古典文学が研究対象とし、文学研究が深化する可能性も大いにあり得るのである。その意味では、比較古典文学がそれほど進歩していない分野であるからこそ、本研究は重要な貢献になり得ると考えられる。

研究構成

各章ごとの内容を具体的に述べると、以下のとおりである。まず第二章では、芥川文学に取り組む際になぜ西洋古典のモチーフが重要なのか、また芥川が西洋古典に関しての知識をどこから得たのか、という二つの問いに答える。周知のとおり、明治以降、日本文学は西洋化することに努めた。その結果、十八・十九世紀の主な欧米の文学作品とともに、プラトンやホメロスといった西洋古典の代表的な作品も日本に積極的に受け入れられ、日本の知的エリートの興味を湧かせた。そのような意味では芥川は例外ではなかった。第二章では、芥川の文庫目録を手掛かりに西洋古典と関係のある書物を調査したうえで、明治・大正時代に西洋の古典文学がどれほど入ってきてどのくらい翻訳されたのかと、西洋の古典文学の普及における欧米近代文学の媒体としての役割を明らかにする。その際、そ

の背景として、明治初期から始まった、日本の古代芸術における古代ギリシャの芸術の影響—法隆寺のエンタシスの仮説など—にも着目する。

第三章では「神神の微笑」、いわゆる文学作品の視点から西洋古典のモチーフのあり方を三つの観点から明白にする。第一に、日本化する三つの西洋の古典「Bacchanalia」の場面と「百合若伝説」そして古代ギリシャの神々を考察する。第二に、芥川作品の主題である、神々の復活とキリスト教への反発の態度に、ヨーロッパ近代文学の視点から取り組み、それらの意味および位置付けを明確にする。第三に、芥川のインスピレーションであると考えられる、ハイネの『流刑の神々』と「神神の微笑」を比較し、芥川が用いる西洋の古典的要素が、本当にハイネの模倣に過ぎないのかという問いに答え、芥川の独創性について考察を深める。

第四章では「文芸的な、余りに文芸的な」、いわゆる評論的な作品の視点から西洋古典のモチーフのあり方を三つの観点から明白にする。まず芥川の芸術論と新プラトン主義の関係を浮き彫りにする。山敷和男の研究成果を背景とし、その芸術論を形成する要素を新プラトン主義の視点から分析する。次に彼の思想に見られるニーチェの「アポロ・ディオニュソス論」の影響に迫る。晩年の芥川が展開するニーチェの「アポロ・ディオニュソス論」への批判、またその批判がもたらす矛盾をあぶり出す。最後に晩年に構想された身体美と古代ギリシャの彫刻の関連である。芥川における「官能的な」「ポルノグラフィイ」に近い、ミロのヴィーナスが象徴する美を、身体モデルとして解釈する。

第五章では、以上の論じたことを踏まえ、文芸的かつ評論的な視点から分析された芥川文学の西洋古典のモチーフの実態を明らかにする。そして本研究の目的のところ述べてきた三点（「芥川文学において西洋古典が果たしている役割」、「西洋古典のモチーフとしての扱われ方」、「その扱い方からわかる芥川の西洋古典の知識の深さ」）をもとに結論を出す。